日経産業新聞 2010年4月28日号 第23面

仕事人秘録

人に恵まれた転職人生 ②

元ライブドア社長
平松 庚三氏

学生時代、1冊の本に触発

平松氏は1946年1月6日、北海道函館市で生まれた。

父は大手水産会社の日魯漁業（現マルハニチロホールディングス）に勤務するロシア語通訳だった。主要漁港である函館に駐在し、そこで母と知り合ったらしい。だが、私には函館の記憶がほとんど無い。というのも、父の転勤で生後まもなく埼玉県浦和市（現さいたま市）に転居したからだ。

幼少期は本当にのびのびとしていた。近くにある浦和第一女子高の校庭で三角ベースボールをしたり、近くの神社の境内で友達と遊んだりした。小学校高学年から中学校までは剣道にも打ち込んだ。決してうまくなかったが、最終的に初段となり、団体戦では先鋒（せんぽう）を務めていたと思う。

終始こんな具合で、とてもスパルタ教育とは言えない我が家だったが、東京外語大出身の父からは2歳下の弟と一緒に英語や算数・数学を教えてもらっていた時期もある。

父による個人授業は私の世界への関心を高めるのに大いに貢献したが、1つ愉快でないことがあった。それは同じ内容を弟にも一緒に教えたことである。弟は常に2学年分先取りして習えることになる。おかげで弟の学業成績はいつも私より格段に優れていた。

平松氏は61年、当時甲子園出場の常連校だった埼玉県立大宮高校に進学する。

高校時代は戸田公園の漕艇場に入り浸った（左から2人目が平松氏）

高校時代はボート部に所属し、戸田公園にある漕艇場に入り浸る日々が続いた。ポジションは一番前でこぐストロークで、何度かインターハイにも出場できたのは良い思い出だ。好きな科目は英語と地理。ただ、相変わらず全く勉強をしなかったことが響き、大学受験では何校も受けたが、早稲田大学第二文学部しか現役合格しなかった。

仕方なく早大に進学したものの、1年の時に大学紛争が始まった。授業もなく、人生の目標も見失い、ひたすら東京・高田馬場のマージャン荘でもんもんと無為な時間を過ごしていた。そんなある日、1冊の本と出会い、私の人生に一筋の光明が射す。

その本のタイトルは『南ヴェトナム戦争従軍記』。著者である岡村昭彦はアメリカが支援する南ベトナムの敵の解放戦線（ベトコン）側に潜入していくような、とてつもない従軍カメラマンだった。そのたった1人で世界で活躍する雄姿に強い衝撃を受け、私も海外に行こうと決心した。

早速、昼はトラック運転手、夜は上野駅で郵便列車への積み込みのアルバイトを掛け持ちで始めた。具体的な渡航計画があったわけではない。ふがいない人生を漫然と送る自分にとにかく活を入れたかったのだ。